

パリ紀行

鴛淵紹子

(女子大学教授)

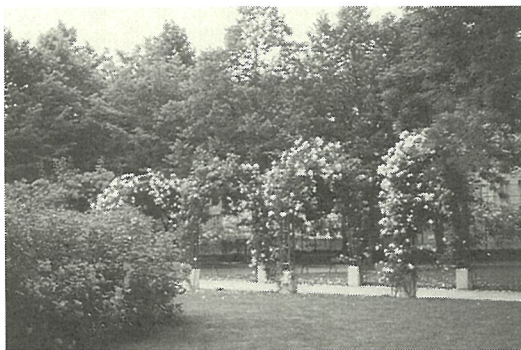
エコール ノルマルの前で

はじめに

私にとって、パリは始めてではない。しかし一九九一年に十一日間滞在したのが最長で、あとはいつも三―五日のかけ足旅行であった。長年、希望していたパリでの在外研究の機会が与えられた今回(九三年)は、百日余りをパリで過した。そのため、短期間とはいえ、アパートも借り、自炊生活をおこなったのである。

一 ピュトウと十五区のこと

予定していたアパートの改修工事が終わっていなかったで、最初の二十日間をピュトウで過した。地下鉄一号線の西の終点、ラ・デファンスの一つ手前の駅でおりののだが、セーヌを一步越えただけで、この辺はもうパリではない。高層建築が立ち並び、その隙間から辛うじてエッフェル塔がみえると、あゝパリだなと思わせられるが、国籍不明の町、それがピュトウである。朝のラッシュ時と、土、日に新凱旋門を見学にゆく人たちが以外、この駅で乗降する人は少ない。それだけに夜は真暗で、スリが出没するとのことであつた。この時期、市庁舎の周辺ではヤエザクラが満開だった。



アパートの前の公園

五月一日から、地下鉄十二号線C駅近くのアパートに移った。エスカレーターを上ってゆくと、目の前にカフェ デュボン、その隣に花屋、ブティック、食料品店、スーパーが並んでいる。朝市も有名で、十五区のきわめて庶民的なところ。駅から歩いて五分のアパートの前には小さい公園があり、バラがたくさん植えられていた。子供の遊び場もあり、夕方はにぎやか。住いは

九階なのでとても見晴しがよかった。通常、洗濯物を外に干すなどといわれていたが、ベランダ付きなので上手に干していた。

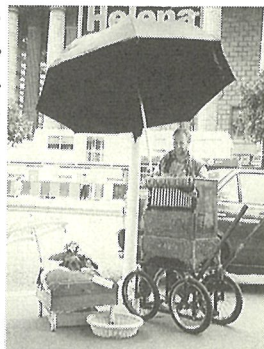
二 メトロのこと

パリに住むなら、絶対にカルト オランジュを買うべきだと教えられていたので、一週間目に購入。最初は月の半ばであったので、一週間のクーポンを買う。五月と八月は一ヶ月券を買ったが、メトロとバス代が実に安上りですんだ。一週間券が二区間で五十九フラン、一月券は二百八フラン、一回づつだと六・五フラン。パリ市内は二区間ですべてOK。しかし、無賃乗車の何と多いことか。改札をたび越え、あるいは仲間同志だと、出口の自動扉を押えさせておいて入り込む。切符売場の人は何もいわない。たまにプラットホームの手前で検札していることもあるが、その程度でただ乗り防止は出来るのかな？ 郊外急行線RERはその点、厳格。外に向いているエレベーターは故障が多い。木の葉がまい込んだり、捨てられた切符が詰るからだろう。地下鉄は、駅も客車内も落書きがいっぱい。座席にも。いつ書くのかと思うが、いささ

か情けない。驚いたのは、車内で演説したり、演奏したり、ある時は人形芝居までする人がいることである。誰も文句もいわず、ニコニコしていて、あとで帽子や罐^{カン}がまわってくるお金を入れている。フランスはカトリックの国だからといっていた人があるが、無賃乗車かも知れない人にお金をあげるのもおかしい話だと思う。

大きな地下鉄の通路では、物乞いする人、演奏する人が必ずいる。五月頃、マドレーヌ駅のプラットホームに、いつもハーブを奏しているおばさんの姿があった。「コンドルは飛んでゆく」が十八番らしく、上手な演奏でたっぷりお札を入れてもらっていた。アルマ・マルソー駅のヴァイオリン弾きもなかなか上手。下手な人の帽子や箱にはお金が少ない。みなよく知っている。マドレーヌ駅の地上に街頭オルガン弾きのおじさんがいて、犬をお供に演奏。おとなしい犬は、いつも小さなベッドの中にふとんをかぶって寝ていた。この人は、八月末にはサン ジェルマン デ ブレ教会の横に移動していた。

日本では、電車の中でよく居眠りをして



街頭オルガン
犬をつれている

いる。私はパリ在住中、絶対に居眠りしなかった。というより出来なかった。それは日本が安全な証拠。それとフランスの人たちは、席のつめ合わせを絶対しない。隣が空いても知らぬ顔で、あとから来た人は、またいでも奥に坐る。

三 祭日とヴァカンス

四月から八月は、夏のヴァカンスを含めて休祭日の多い時期であった。私が到着した日が四月十一日の復活祭。五月一日は労働の日。この日は「ずずらんの日」ともいう。きくところによると、この日だけは誰もが許可なくずずらんを売ってもよいとのこと。町の至る所で子供たちまでが、しおれかけたずずらんの花束や、鉢植えを押しつけてくる。日頃お世話になる人に差上げるといふ習慣もあり、私は留学中の卒業生

から頂いた。五月八日は終戦記念日。九三年のように、土、日休日が二週間も続く日常生活が不便になると心配したが、アラブ系、ユダヤ系の人々の個人商店は店をあけているので食料品には困らない。五月二十日は「キリスト昇天日」。復活祭後四十日目の木曜日。この日から四連休する人たちが多く、銀行やサル プレイエルのチケット売場まで全部休み。デパートだけは不況のせいで、例外と断り書きをつけて、必死の安売をしていた。この四連休中、ノートルダム大聖堂の周辺は、ドイツ語と英語が氾濫。観光客でいっぱいであった。五月三十日は「聖霊降臨日」。そして六月一日は母の日。七月十四日は革命記念日。その前夜、バスチーユ広場では、若者が爆竹を鳴らして大さわぎしていた。たまたまオペラをみに行っていたため、帰りの地下鉄の駅や、車の中で爆竹に追いかけられた。私が余程いやな顔をしたとみえて、若者がこれは祭だからと一生懸命とりなしてくれた。十四日当日は、朝から雨降り、ものすごく冷え込んでいた。TVでシャンゼリゼー大通りでのパレードをみた。ミッテラ

ン大統領、パラデュール首相らコートを着て列席。シモーヌ ベイユ保健相の紺系のスーツの色がとても印象的だった。彼女だけはにこやかだが、あとの閣僚はみなむつり顔。飛行機がフランス国旗の三色のケムリを撒きながらとんでいた。夜中、ベランダから花火をみる。近所のアパートでも大ぜいの人たちが屋上で見物。ただし寒い何の。日本も冷夏といわれたが、七月の Пари は日本の三月並。この頃からヴァカンスに出る車の列をTVで写している。ノルマンディ方面へのTGVの運行が始り、さかんに宣伝。アパート周辺の個人商店のヴァカンスも始まり、せっかく見つけてあったおいしいケーキ屋も八月いっぱい休みになり、帰国までにもう一度たべようと思っていた夢は破れた。

四 オルガン コンサート

今回、私の重要な仕事のひとつは、パリのオルガンをきくことにあった。それ故、到着したその日から、オルガン コンサートめぐりを始めた。

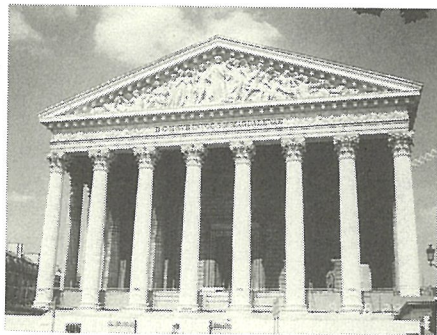
ノートルダム大聖堂では九二年末にオルガンの修復が終り、毎日曜、夕方五時半と

月の第二火曜日の夜にオルガン演奏会が行われる。日曜演奏会はいつも超満員。主要祭日は専属オルガニストが演奏。それ以外の時には、世界各地から演奏家が来ている。現在、専属オルガニスト中の二人はまだ三十歳代であるが、技術面、音楽性ともにすばらしい。

ドラクロワの壁画でも知られるサン・ユルピス教会では、ヴィドール、デュプレらの長年の大活躍の後、現在はD・ロートが主任オルガニストを務めている。毎日曜、ミサのあと十一時半頃からの演奏会が有名で、それを目当てに、ミサの終る頃やつてくる人が多い。A・カヴァイエ・コル作の大オルガンがロマン派の楽曲にふさわしい。毎月第四火曜日にも、無料で特別演奏会が開かれている。

マドレーヌ教会は、八月末に外壁の修理が終り、ギリシヤ風の美しい建物が再び完全な姿をあらわした。サン・サンス、フォーレなどがオルガニストをつとめたこの教会では、二週間ごと、日曜日の午後四時から演奏会が行なわれている。

ドビュッシイ以後の二十世紀最高のフラ



修理のための外装がとれ再び姿をあらわしたマドレーヌ教会

ンスの作曲家といわれるO・メシアンが長らくオルガニストを務めたトリニテ教会では、オルガンの演奏会をきく機会はなかったが、日曜日のミサの後奏がものすごい迫力で演奏されていた。コシユロー、メシアン、デュルフレ、ラングレ、リーテーズらが相次いで亡くなった現在のフランスでは、オルガニストが大きく世代交替している。トリニテ教会のN・アキムもまだ三代後半。しかし、ノートルダム^ののO・ラトリ、P・ルフエーブルらと同様、演奏技術、即興演奏、そして彼らのもつ音楽的才

能は実にすぐれたものである。

レ・アレにあるサン トウスタツシュ教会には、九〇年にオランダ製のオルガンが設置された。またラ・ヴィレットに移転した、パリ国立音楽院のホールには、オーストリーの楽器がおかれているが、誇り高きフランス人がそれによいのかと私の方が疑問を抱く。

五 カフェのことなど

歴史的に有名なカフェ「ドウ マゴ」、「カフェ ドラベ」、「ル プロコップ」は話の種に行ってみたが、前二者は値段と名前の割に大したことはない。ただ「プロコップ」のデザートはきわめて美味。むしろ、モンパルナス通りの「ラ ドゥース」、名前は忘れたがバガテル公園内のカフェには、もう一度行きたいと思っている。

和食、中華料理が多いことはきいていたが、テルヌの「おかめ」というお総菜屋で、フランスの青年が、サバの塩焼や、ホーレン草のごま和え、筑前煮などを買ってゆくのは少々びっくり。「きんたろう」なども日本人以外のお客が非常に多い。お箸^{ハシ}の使い方も日本人以上に正統的。せつかくのバ



バガテル公園内のカフェで、イチゴタルトがおいしい。

りで、結局本格的フランス料理はたべなかった。

六 パリの日常

パリを訪れるたびにスーパーが増えてゆく。ギャルリー・ラファイエットや、プラントン、ボンマルシェのようなデパートにもスーパー方式の食料品店が出来ている。野菜や果物は自分で選んでビニールの袋に入れ、秤^{ハカリ}にのせる。出てきた値段表を貼ってレジへ。日本なら「触るな」といわれそうなサクランボ、モモ、トマトなども勝手に入れる。とくにサクランボの時期、オジ

サン、オバサンたちは、一粒づつ選んで袋に入れながら、時々、ほいほい口にも入れている。誰も何もいわない。最初の頃、誰かが入れてくれるものと突つ立っていた私はバカみたいだった。パゲットもドウミ(半分)で買うことを覚えてから、いつもおいしく食べられるようになった。

パリの人たちが信号無視することはよくきいていた。私も二三日でその仲間入り。留学生に「先生、もうパリジェンヌになっている。」と何度もいわれた。あそこまで歩行者優先されると、自分で車の運転は出来ないな。

パリの石だたみ道は靴泣かせ。スーパの中に、ミスターミニットを見つけ、いそいそと修理を頼んでみたら、ひまのかかること。日本ならせいぜい十分以内で直してもらえるのに、大体半時間はかかる。少し大きな修理だと半日かかる。店の名前を変えてほしい。

電話は今では九十八パーセント、カード式になっている。コイン式のもの、レストランやカフェ位にしかない。公衆電話がコイン式だと、浮浪者が器械をこわしてお

金を盗んでゆくのだそうである。同様に自動販売器は今でも殆んどみられない。

ゴミ収集車は朝早くまわってくる。ビン



空ビン用のボックス

捨て用の大きなミドリ色の箱が吊り上げられ、中味をトラックに積落してゆく。通路の水が勢いよく放水され、緑のへなへなボーキをもった掃除人さんたちが、道を洗ってゆく。しかし昼間は、道に犬の糞がつばいで、うっかり、上を見て歩いていて、足もとが何か変だなと思うと必ずふんづけているのである。

あこがれのパリにも欠点が多い。しばらく生活すると少々くたびれてくる。それゆえに2ヶ月余り過ぎた頃、ドイツへ、スイスへ、さらに南フランスへの旅行を開始した。



パリでないのが残念
南フランスの教会で18世紀のオルガン